松任市宮永遺跡

1984

石川県立埋蔵文化財センター

松任市宮永遺跡

1984

石川県立埋蔵文化財センター

例　言

1．本書は、県営圃場整備事業旭地区宮永工区区画整理工事に係る松任市宮永遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査期間

昭和58年６月６日～同年６月28日

3．調査担当者

三浦純夫、戸澗幹夫

4．調査補助

栃木英道、山津康義、石浦めぐみ

5．出土品の整理にあたっては、遺物の洗浄と記名は石浦めぐみがあたり、土器の実測は栃木英道による。掲載した遺構図のトレースは山津康義があたり、遺物は戸澗があたった。

6．本書の執筆・編集は戸澗があたり、編集には栃木・山津の協力を得た。

7．ＥＷ２トレンチ出土土器観察表（第２表）は栃木英道がまとめた。

8．挿図中の方位は磁北を示しており、レベル数値は絶対高である。

9．本文中の（註）は、すべて巻末に掲げた。

10．発掘調査では、次の方々の協力を得た。

赤座友栄、中島静枝、浅野みどり、前田文子、宮本紀代子、田中常盤、福田ハスエ、清水芙詩子、福田豊吉、得田隆

松任市宮永遺跡

目　次

例言

第Ⅰ章　位置と環境…… 1

1　地理的環境…… 1

2　考古学的環境…… 3

第Ⅱ章　調査の経緯と経過…… 7

1　これまでの調査…… 7

2　調査の経過…… 7

第Ⅲ章　遺跡の概要……10

1　遺跡の範囲……10

2　調査の方法と層序……10

第Ⅳ章　検出遺構……15

1　溝状遺構……15

2　土坑……16

3　その他の遺構……19

第Ⅴ章　包含層出土土器……26

第Ⅵ章　まとめ……27

（註）

挿図目次

第１図　宮永町の位置…… 1

第２図　周辺の地形と調査区…… 2

第３図　周辺の遺跡…… 5

第４図　昭和57年度旭・宮永地区分布調査範囲…… 8

第５図　ＥＷ１トレンチ土層模式図……10

第６図　遺構実測図（ＥＷ１トレンチおよびＥＷ２トレンチ）……11

第７図　２号溝出土土器……15

第８図　２号土坑実測図……16

第９図　土坑出土土器……17

第10図　４号土坑実測図……17

第11図　５号土坑実測図……18

第12図　６号土坑実測図……18

第13図　掘立柱建物跡実測図……19

第14図　ピットおよび包含層出土土器……20

第15図　ＥＷ２トレンチ西端落ち込み出土土器（１）…… 22
第16図　ＥＷ２トレンチ西端落ち込み出土土器（２）…… 23

表目次

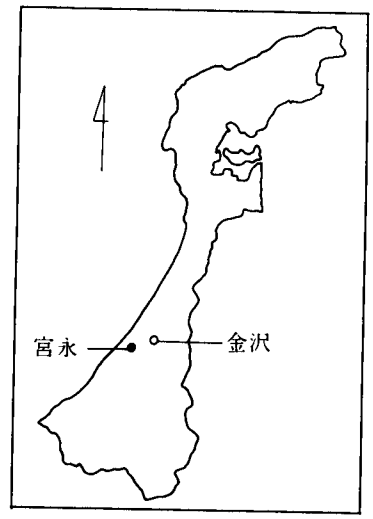
第１表　周辺の遺跡名とその時代…… 6
第２表　ＥＷ２トレンチ西端落ち込み出土土器観察表……24

図版目次

図版１　宮永遺跡周辺の空中写真
図版２　ＥＷ１トレンチ　東側から（３区～）、同（６区～）、同（10区～）、ＮＳトレンチ　北側から
図版３　ＥＷ２トレンチ　東側から、同西端落ち込み　東側から
図版４　５号土坑、６号土坑
図版５　掘立柱建物跡（検出状況）、掘立柱建物跡
図版６　出土土器
図版７　遺構出土土器、ＥＷ２トレンチ西端落ち込み出土土器
図版８　ＥＷ２トレンチ西端落ち込み出土土器

第１章　位置と環境

１．地理的環境　（第１・２図）

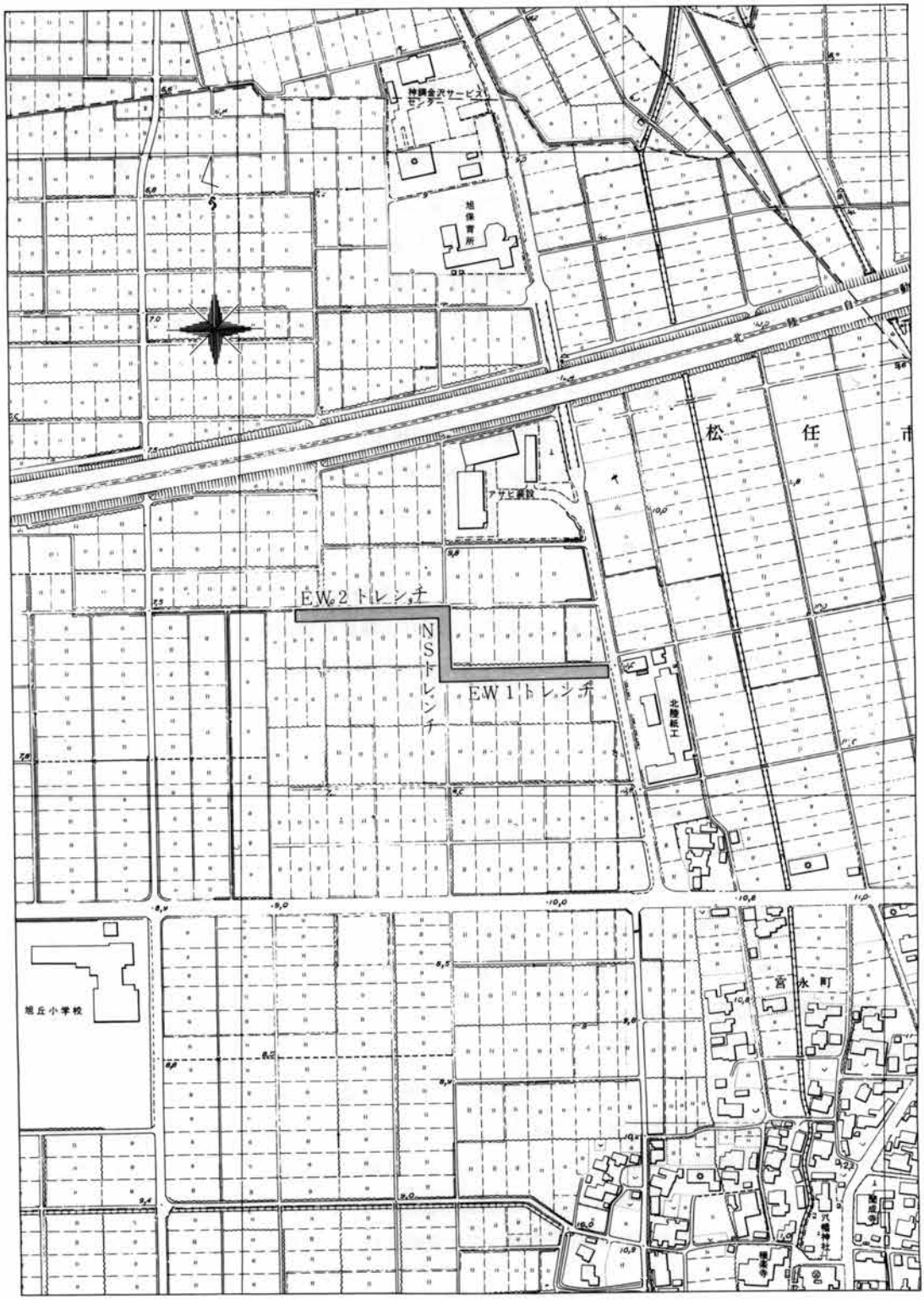


第１図　宮永町の位置

宮永遺跡は、松任市街地の北方約２kmにある松任市宮永町地内に所在する。金沢市の南西方にも近く、標高９ｍ前後を測る手取扇状地の北扇部に立地する。北東には富樫丘陵・富樫山地を遠望し、西は低湿で湧水帯の手取扇状地扇端部へと変換して日本海に至る。海岸線には、古墳時代初頭に形成されたと考えられている安原砂丘(1)が発達し、扇端部を被覆している。北は、徐々に地形が低くなり、犀川・伏見川ラインで手取扇状地との境をなして沖積平野が広がっている。一方の南には、手取扇状地の扇央部を控えている。手取扇状地は、白山を源とする県下最大の手取川によって形成された曲率半径12km、扇形の開角度110度を測る標式的な扇状地形であり、石川平野の一角を占めている。手取川は、〝あばれ川〟の異名をとり、古来より本流河道の変遷が激しかった。『三宮古記』正和年間（1312～16）条にみえる「河ヨリ南方、寺井・安宅・福富」と記されている如く、鎌倉時代末期頃は現在より北方にあったことを示している。そのため、扇央稜線（鶴来駅から松任市徳光を結ぶ線上）より南側の地域は、河道の南遷による氾濫が著しく、本遺跡の位置する北側の地域は南側に比して氾濫を受けることは少なかった(2)。現在、手取扇状地は全国にも知られる早場米地帯として美田景観をなしている。それは、明治年間に施行された耕地整理によるものであり、一見低平にみえる地形も、かつては微低地・微高地が複雑に入り組んだ微細な地形変化が認められるところであった。また、扇状地を網状にめぐる七ヶ用水（富樫・郷・中村・山島・大慶寺・中島・新砂川）とその分流は、手取川の分流・支流の旧河道と考えられているものであり、旧地形の復元には見逃せない存在といえる。

さて、宮永遺跡は宮永町集落の北にある通称オノデン・オホイナバ・ボウダ・ニタンダと呼ばれる水田地帯に占地する。その付近の地形を仔細にみると、北・東・西に傾斜をもち、遺跡の大部分は南の宮永集落方向から舌状に張り出す微高地に立地しているといえる。この微高地は、東に貫流する柄口川（馬場川）や柳橋川（東川）などの旧手取川の分流・支流の氾濫で形成された自然堤防にあたると考えられる。手取扇状地北扇側に立地する遺跡の多くは、縄文遺跡をはじめとして、地下水の自噴と係る微低地に立地することが知られており(3)、その点では本遺跡の立地は対照的といえる。本遺跡の西には、１ｍ強の落差をもつ低地が広がり、中村用水の本流である倉部川が北流している。グライ土壌が発達する半湿田地帯であり、古代から可耕地と利用されたことであろう。倉部川は、かつては金石経済圏への物資輸送路として機能していたともいわれている。(4)

現在、本遺跡の一部には、北陸自動車道が横断し、または工場用地となっている。



第2図　周辺の地形と調査区(5千分の1)

2．考古学的環境（第3図・第1表）

手取扇状地の北東端地域で確認できる最古の歴史は、古府遺跡や北塚遺跡をはじめとする縄文時代中期からである。それらは、手取・犀川の複合扇状地帯に立地するもので、それより南下した本遺跡周辺には、後・晩期の遺跡が顕在化している。本遺跡の北東約3kmには、八日市新保式の標式遺跡である新保本町チカモリ遺跡があり、先年巨大木柱遺構が検出されて全国的にも話題となった(5)。北東約1kmには中屋式で知られる中屋遺跡があり、東方約3kmには県下最大級の縄文集落跡として名高い御経塚遺跡が存在する。これらは、北陸における縄文晩期の土器編年の標式遺跡であり、本地域を代表する該期の中核的集落跡といえる。それら大集落跡に対し、規模の小さい遺跡も数多く存在する。本遺跡の北に隣接する一塚遺跡、南に接する宮永B遺跡の他、東約1kmにはジョウガンジ遺跡やゴクラクジ遺跡があり、南西約700mには福増遺跡や下野式期として知られる下福増遺跡(6)などがある。このように、大集落が鼎立し、さらにその周辺に数多くの集落が営まれているのは、本地域が採集経済下にあって優れて恵まれた条件下にあったことを物語っている。その点について高堀勝喜氏は(3)、本地域の縄文遺跡の多くは湧水のある微低地に立地し、かつて樹木が繁茂していた微高地は採集経済をささえる豊富な食料資源を提供する場であったからだと、その背景について指摘された。

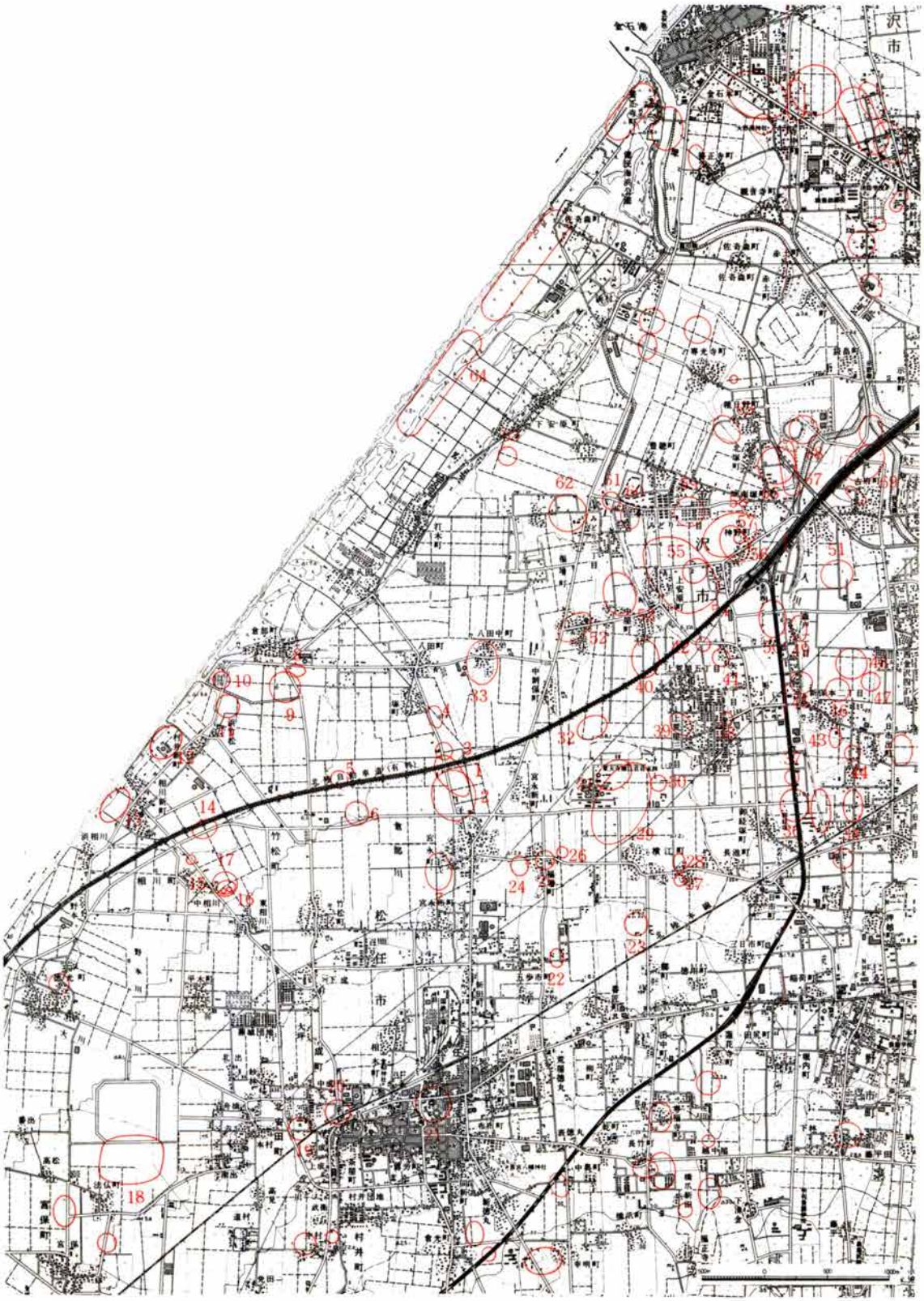
次の弥生時代では、北東約2kmの犀川・十人川・伏見川などが縫合する湧水地帯付近に上安原陸橋遺跡、同緑団地遺跡、緑団地下水処理場遺跡などの中期に遡る遺跡が密集しているが(7)、本遺跡周辺の中期の遺跡は比較的少ない。東約1kmの横江庄遺跡(8)下層より中期の土坑が検出されている他、下福増遺跡から小松式土器が出土している。しかし、後期以降とくに終末期から古墳時代前期にかけての遺跡は飛躍的な増加をみることができる。東約1kmにある横江A遺跡では、後期中頃に比定できる方形周溝状遺構や終末期の土坑と溝状遺構が検出されている。本遺跡に接する旭小学校遺跡は(6)、弥生終末期から高畠式期の遺跡であり、西約1kmにはS字状浮文や棒状浮文を配した装飾器台形土器の出土で知られる竹松遺跡(9)がある。南西約4kmには、弥生後期後半に比定される竪穴住居跡11棟や約50基の土坑が検出された法仏遺跡(10)がある。西約2kmにある倉部出戸遺跡では月影式期の壺棺と想定されるものが出土しており(11)、海岸砂丘下にある泥炭層地帯にも月影式期を中心とする下安原海岸遺跡や相川新雁田川遺跡などがある。東約1kmの御経塚B（ツカダ）遺跡(12)でも月影式期の竪穴住居跡や倉庫状遺構が検出されている。これらの他にも弥生時代終末期から古墳時代初頭期の遺跡は数多く点在している。こうした該期の集落の急激な増加現象は、鉄器の供給量の増加にともなう営農形態にねざすものと一説では考えられており(13)、本地域においては、扇端部の低湿地や砂丘の後背湿地が水田適地であったことも大きな要因であろう。

古墳時代後期の遺跡については、先述の御経塚B遺跡で住居跡の存在が確認されているが、調査例も少ないことから集落跡の実体は不透明である。本遺跡の北にある一塚地内では、一塚古墳の名を残すが現存していない。南西約2kmには中相川古墳(6)があった。径10～15m程の小円墳二基が近接して存在したと伝えられるが詳細は不明である。北東約3.5kmには、おまる塚古墳を中心とする北塚古墳群が存在し、金沢平野に現存する貴重な古墳群である。

奈良・平安時代に至ると、扇端部だけでなく扇央部にも集落が営まれるようになった。それは、前代の低湿地などの人工灌漑に依拠する新たな営農形態への展開を示す証跡といえる。かつて、扇央部は遺跡の不毛地帯と理解されたが、昭和39年の三浦遺跡の発掘調査とその研究[6]によって、そうした先入観はぬぐい去られ、以後の扇状地における古代開発史の考古学的研究に大きな影響を与えた。それによれば、暴れ川の異名をもつ手取川からの治水には、律令国家権力の介入を背景とした在地有力層の積極的な勧農政策があったことが明らかにされている。本遺跡の南東約5kmにある末松廃寺は、その前史を物語るにふさわしいものであるが、在地有力層の系譜を考えるうえでの古墳群の存在がやや不透明といわざるをえない。

さて、手取扇状地の古代開発史を知るえうで、文献からも存在が確認できる横江庄遺跡[8]の調査・研究は見逃せない。本遺跡の東約1kmにある横江庄遺跡は、正倉院文書弘仁九年（818）3月17日付けの酒人内親王の施入状に裏付けられる平城皇紀朝原内親王から東大寺に献上されたことによって成立した初期庄園遺跡としてあまりにも著名である。昭和45年の発掘調査では、五間に二間の母屋を中心にして内庭を「コ」の字形に囲む4棟以上の掘立柱建物跡群が検出され、庄所の実像が明らかにされた。出土品には、奈良時代末期から平安時代初期にかけての豊富な土器に加えて、「三宅」、「内」、「万」、「継」などの墨書土器や陶硯、下駄、木櫛などがある。庄所跡に東接する横江ジョウガンジ遺跡は[8]、庄所と時期的に併存しており両者が密接な関係を保持しつつ推移した遺跡と考えられている。また、横江集落の南には平安期と推定されている横江B遺跡[8]があり、庄家とその周辺の村落景観を復元するうえで注目される存在である。先述の法仏遺跡は[10]、奈良・平安時代の遺構も際立っており、64棟にも及ぶ掘立柱建物跡と竪穴住居跡が確認されており、奈良時代から平安時代中頃にかけて継起的に営まれた大集落跡であることが判明している。東の御経塚B遺跡では[12]、奈良時代の竪穴住居跡7棟と奈良時代後半から平安時代中頃に営まれた13棟の掘立柱建物跡が確認されている。また、土馬1点が土坑状遺構上面に供献されて出土し、集落内の祭祀行為の一端を窺わせた。北約2.5kmにある安原工業団地遺跡[14]では、大型の掘立柱建物跡が検出されており、「吉」「生尖」などの墨書土器数点が出土している。これらの他に、本遺跡周辺にはあさひ荘遺跡、中屋ヘシタ遺跡、上安原陸橋遺跡などの律令期の遺跡が知られている。

中世以降の遺跡としては、まず本遺跡の南にある坊の森遺跡があげられよう。この地は、坊の森の他に、釈迦堂・宮畑などの古地名を残し、旭将軍義仲が越中より上洛の途中この地に宿陣したという伝承地でもある。明治五年に金属製佛器1点が出土しており、一説には天台宗極楽寺跡と推定されている[15]。横江町集落の北には横江館跡がある。その周辺の古地名には、タチ・東堀・西堀・矢閉・飼馬などが存在し、林氏第四代の林六郎光明が五男の横江七郎基光以来の横江氏の旧跡ではないかと『横江史』は伝えている[16]。この他、南西約2kmには室町期の五輪塔などが存在する相川館跡があり、西約2kmには倉部館跡がある。一方東約1kmには、御経塚町の地名の由来になったと伝承される経塚がある。南約1kmには寝上市左ェ門館跡があり、同約2.5kmの松任市街地には、宝篋印塔などが出土した出城城跡や、室町時代から安土桃山時代にわたる松任城跡が存在する。



第３図　周辺の遺跡1/50,000(国土地理院1/25,000「松任」「金石」分載)

第1表　周辺の遺跡名とその時代（番号は第3図に準ずる）

遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 宮永遺跡	弥生～奈良・中世	35 御経塚B遺跡	古墳・奈良・平安
2 宮永B遺跡	縄文・古墳・中世	36 御経塚遺跡	縄文後～晩期
3 旭小学校遺跡	弥生・古墳	37 御経塚C遺跡	古墳
4 一塚遺跡・一塚古墳	縄文・古墳	38 上荒屋住宅遺跡	弥生
5 竹松遺跡	古墳	39 上荒屋遺跡	縄文
6 竹松B遺跡	不詳	40 中屋遺跡	〃
7 坊の森寺跡	室町	41 矢木本町遺跡	〃
8 倉部出戸遺跡	古墳	42 上安原陸橋遺跡	弥生
9 倉部館跡	室町	43 新保本町ツカダ遺跡	〃
10 倉部川遺跡	不詳	44 新保南遺跡	中世
11 浜竹松遺跡	古墳・奈良	45 森戸住宅遺跡	縄文
12 相川新雁田川遺跡	弥生・古墳	46 新保東遺跡	古墳
13 浜相川相川新遺跡	弥生	47 新保西遺跡	〃
14 相川新A・B遺跡	古墳	48 新保本町チカモリ遺跡	縄文
15 御手洗川遺跡	〃	49 森戸本町遺跡	〃
16 中相川1・2号古墳	〃	50 森戸バイパス遺跡	古墳
17 相川館跡	室町	51 松島ナカオサ遺跡	平安～中世
18 法仏遺跡	弥生～平安	52 福増遺跡	不詳
19 安田三郎惟光館跡	不詳	53 中屋ヘシタ遺跡	奈良・中世
20 出城城跡	室町	54 上安原遺跡	奈良・平安
21 松任城跡	室町・安土桃山	55 上安原カナワリ遺跡	古墳
22 あさひ荘遺跡	奈良～平安	56 南塚B遺跡	〃
23 ゴクラク寺跡	縄文	57 びわ塚古墳	〃
24 福増東川遺跡	弥生	58 南塚遺跡	縄文後～晩期
25 寝上市左エ門館跡	室町	59 上安原緑団地遺跡	弥生
26 福増遺跡	縄文・弥生	60 緑団地公園遺跡	古墳・平安
27 横江B遺跡	平安	61 緑団地下水処理場遺跡	弥生
28 横江館跡	不詳	62 安原工業団地遺跡	平安
29 横江A遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	63 下安原遺跡	縄文
30 ジョウガン寺遺跡	縄文・平安	64 下安原海岸遺跡	縄文・古墳
31 横江庄々家跡	弥生・平安	65 稚日野遺跡	縄文・古墳
32 下福増遺跡	縄文・弥生・古墳	66 北塚A遺跡	縄文
33 八田中雁田川遺跡	縄文・古墳	67 北塚B遺跡	縄文・古墳・平安
34 八日市B遺跡	奈良～平安	68 北塚C遺跡	古墳
		69 古府クルビ遺跡	弥生～平安

第II章　調査の経緯と経過

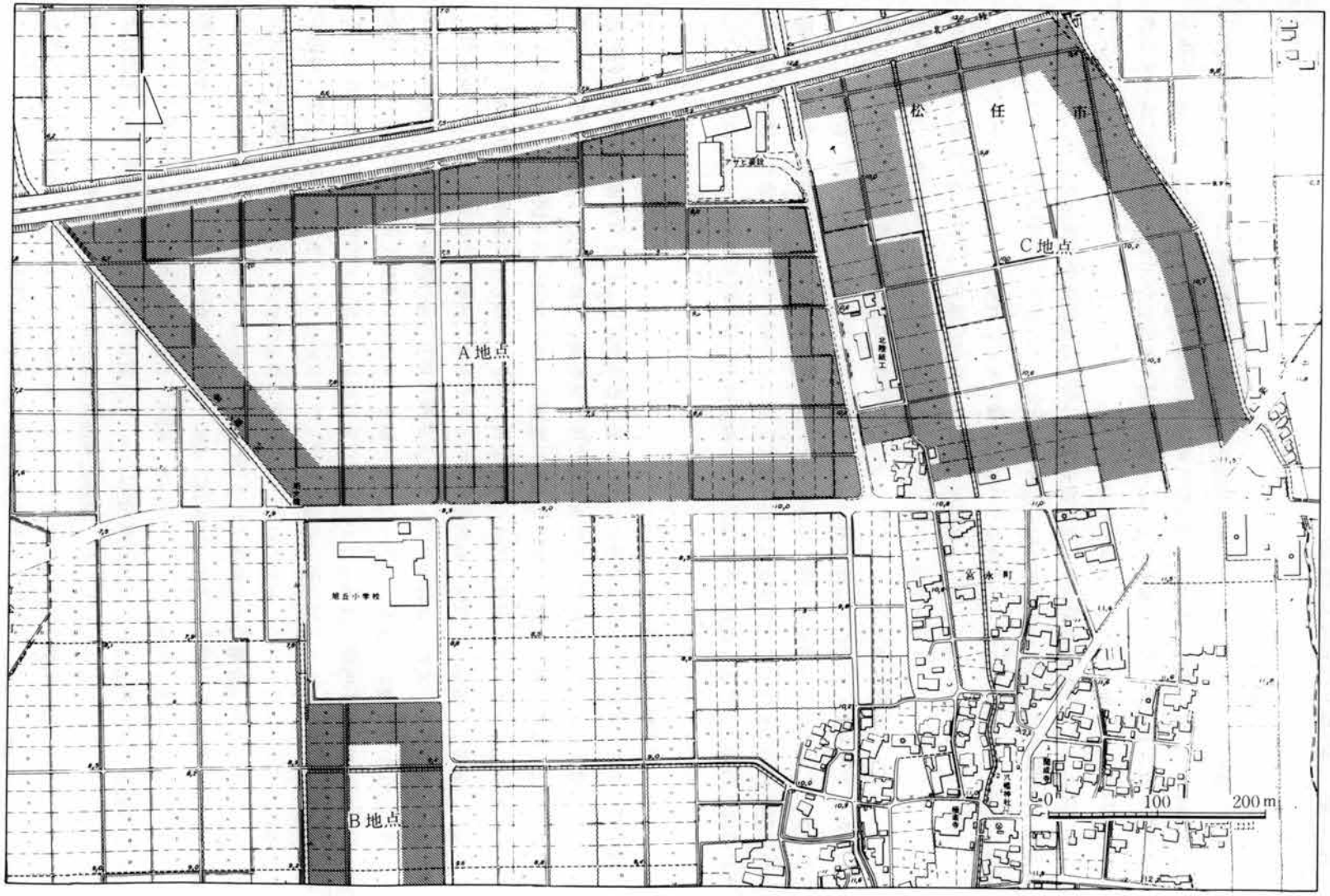
1．これまでの調査

本遺跡の存在が知られたのは、明治42年12月の宮永地内の耕地整理中に弥生土器が発見されたことに始まる[17]。その折の出土土器は宮永町八幡神社に保管されているという。その後、昭和6年に旭小学校新築工事の際に打製石斧をはじめ弥生土器や土師器が出土し、本遺跡に隣接する旭小学校遺跡の存在も知られることとなった。

昭和45年9月、北陸自動車道が本遺跡を縦貫するに先立ち発掘調査が実施されることとなった。調査では、3棟の竪穴住居跡と5基の配石遺構が検出されている[18]。1号住居跡は、5.5×4mの隅丸方形プランを呈するもので、床面より月影式土器とともに鉄製刀子と砥石がセットで出土している。2号住居跡は、規模とプランは明確ではなかったが宮地式土器の時期に比定されると推定されるものであった。3号住居跡は、2号住居跡の下から検出された5×4.5mの方形プランを呈するもので、月影期に比定されるものであった。住居跡の東側に検出された配石遺構には、河原石を配して標示とし、その下に楕円形のピットを掘って石を詰めこんだものと、壺や甕などの土器を配し、その周辺を河原石で標示するものとの二形態が存在した。この調査において、本遺跡が古墳時代前期を中心にして営まれた集落跡であることが明らかとなり、また、隣接する旭小学校遺跡との間にも濃密な遺物散布が確認され、両遺跡が一定の結合関係のもので併存していたことを予測させるものであった。

2．調査の経過（第4図）

昭和57年10月、県耕地整備課より当センターへ松任市旭地区における県営圃場整備事業の照会があり、本遺跡などが周知されている宮永工区に係る分布調査の依頼があった。それを受けた当センターでは、同年10月から12月にかけて工事対象区三ヶ所の地点（第4図A・B・C地点）について分布調査を実施した。調査方法は、水田1枚につき2ヶ所以上の試掘穴（約1m×1m）を設定し、遺物包含層ないし遺構の有無を確認するとともに、各層序の地表からのレベルを明らかにするものである。また、合計560穴におよぶ試掘穴相互の層序関係の検討から旧地形を考慮した遺跡の広がりを確認するものであった。その結果、A地点の東側を中心とする部分では遺跡の広がりとするには不明瞭ではあったが、C地点東辺部からA地点の西側にのびる微高地上に弥生時代末期から中世にわたる包含層の存在を確認した。B地点では、遺物包含層や遺構は検出されず遺跡の広がりはないものと判断された。この調査で得たデーターをもとに工事設計との検討に入り、設計上遺物包含層などが破壊される恐れのある地点については、盛土工法などによる設計変更によって遺跡が保護されるように協議を進め、遺跡の広がりが不明瞭とされたA地点の部分については立合調査を実施することとなった。同59年4月、松任土地改良より協議にもとづく新たな設計と工法が照会され、C地点東辺部については現状の田面レベルの維持と盛土工法によって保護されることとなった。しかし、設計上発掘調査が回避できない排水路敷については、同年6月より発掘調査を実施することとなった。なお、発掘調査中において、包含層レベルのデーターの精度を高めるため、一部トレンチによる再度の分布調査を実施している。



第4図　昭和57年度 旭・宮永地区分布調査範囲

――発掘調査日誌抄――

6月6日（月）晴れ

松任土地改良担当職員と調査範囲の確認とその他の打ち合せを行う。その後、調査区の設定に入る。作業小屋が設置される。

6月7日（火）晴れ

機材を搬入し、耕土除去に入る。標高レベルの移動を行う。

6月9日（木）晴れ

杭打ち作業の後、包含層の掘り下げと遺構検出に入る。

6月14日（火）晴れ

ＥＷ１トレンチ遺構掘り下げ作業を開始する。

6月15日（水）晴れ

設計変更にかかる地点の分布調査を実施する。

6月16日（木）くもり

ＥＷ１トレンチ実測作業を開始する。ＥＷ２トレンチ西端落ち込み掘り下げ作業。

6月22日（水）くもり

実測前の遺構に伴う土器が何者かによって持ち去られており、調査員を落胆させる。ＥＷ１トレンチ実測作業継続。

6月23日（木）晴れ

ＥＷ１トレンチの遺構の写真撮影を行う。ＥＷ１トレンチ実測作業継続。

6月25日（土）晴れ

ＥＷ２トレンチ実測作業を行う。ＮＳトレンチの写真撮影を行う。

6月27日（月）晴れ

ＮＳトレンチ実測作業を行う。すべての実測作業を終える。

6月28日（火）晴れ

機材整理を行い、現地調査を終える。

発掘作業風景

分布調査風景

第Ⅲ章　遺跡の概要

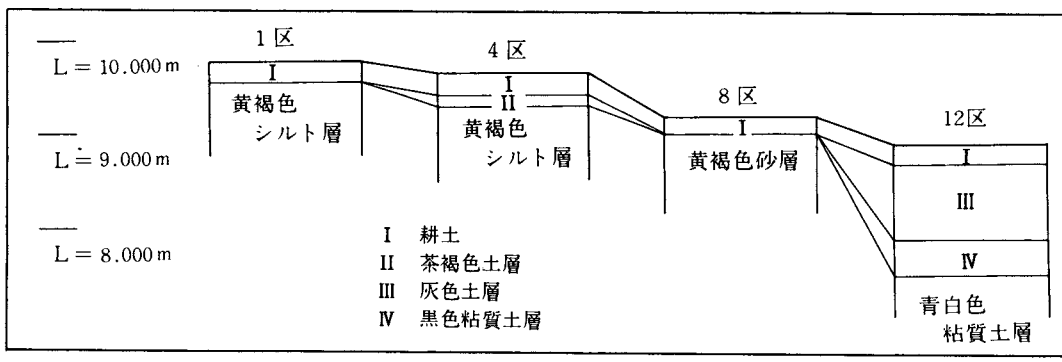
１．遺跡の範囲

先述したように、本遺跡は宮永集落から舌状に張り出す微高地上に立地し、過去の発掘調査や分布調査のデーターから南北約400ｍ、東西約250ｍの分布範囲が推定される。ただ、西に広がる低湿地は古代の可耕地となっていた可能性が高く、それを考慮すると遺跡範囲は大きく西に拡大する。遺跡の北端は、昭和45年の発掘調査で旧旭小学校跡地にまで達していることが明らかとなっており、旭小学校遺跡と重複する。こうした状況や出土土器から、両遺跡は一定期間極めて密接な関係を保持しつつ推移したと考えられ、遺跡としては同一視して捉えていく必要があると考えられる。

２．調査の方法と層序（第２・５図）

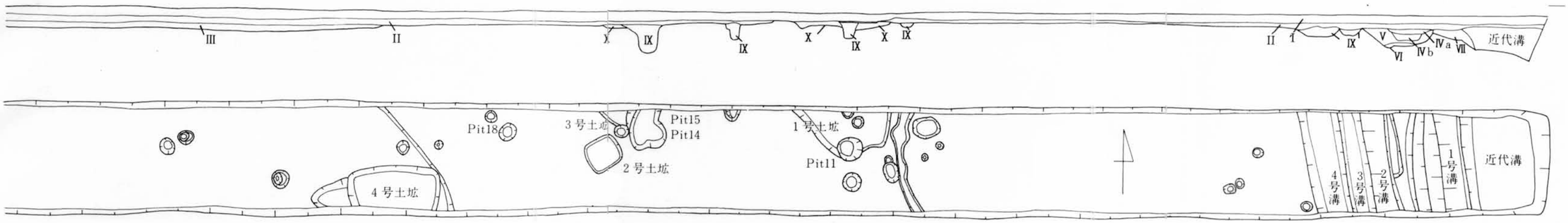
今回の発掘調査は、事前に設計変更や工法変更による協議が進んだこともあって、排水路敷のみが対象となった。幅２ｍ、総延長237ｍ、総面積474㎡を測る。調査区は第２図に示した様に、宮永から一塚方面に走る市道側を起点として東西にある延長128ｍの調査区をＥＷ１トレンチとし、それよりＬ字形に北に折れる延長56ｍの調査区をＮＳトレンチとし、さらにそれからＬ字形に西に折れる調査区をＥＷ２トレンチとした。また、それぞれの調査区を10ｍごとに区割し、１区・２区……と呼称した。

層序については、対象区が東から西へ著しく傾斜する地点にあるため、土層の堆積も地点によって一様ではない。調査区の最も高い地点で標高約9.8ｍを測り、最も低い地点で標高約7.6ｍを測る。土層の堆積状況は、ＥＷ１トレンチの高い地点では耕土・床土下で黄褐色土の地山となり包含層は認められず、検出された遺構も比較的浅い。これは、明治年間に実施された耕地整理による削平の結果であろう。地表が9.7ｍ代に傾斜すると、約10cm程の茶褐色を呈する包含層が残存するが、それも地形の傾斜にそって漸移的に解消される。遺構の存在もその地点で認められなくなり、地山面は砂層ないし礫層へと変わる。地表が８ｍ代を測る低地では、耕土下に灰色土、腐蝕物を含む黒色粘質土、さらには青白色粘質土が堆積し湧水が激しい。検出された遺構はＥＷ１トレンチの１区から６区までと、ＥＷ２トレンチの地形の傾斜にそった土器溜りのみであった。

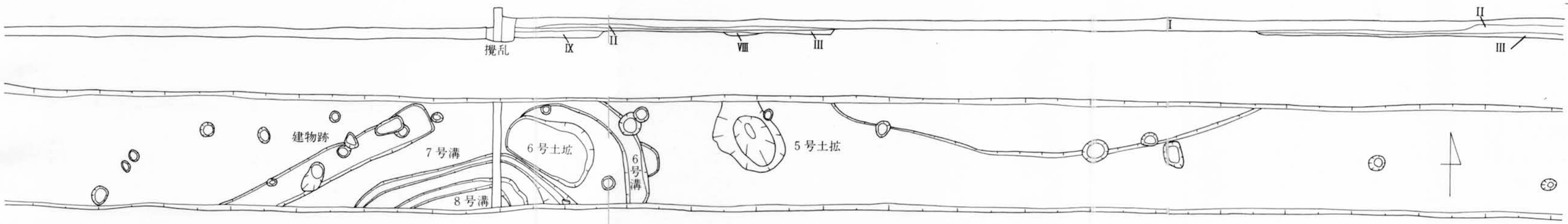


第５図　ＥＷ１トレンチ土層模式図

L＝10.000m



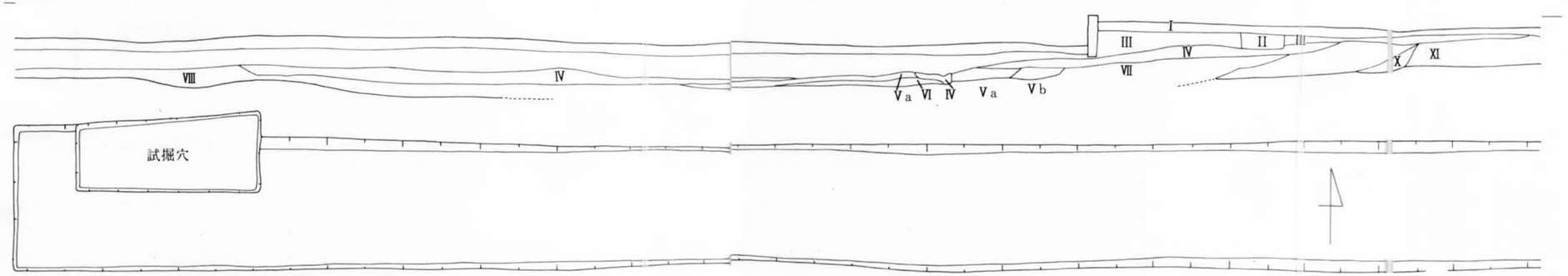
L＝10.000m



Ⅰ　耕土
Ⅱ　床土
Ⅲ　茶褐色包含土層
Ⅳa　暗灰黄色土層
Ⅴb　暗灰黄色土層(若干粗い砂礫を含む)
Ⅵ　明褐灰色土層
Ⅵ　明褐灰色砂層(多量の土器片及び5㎜大の小礫を含む)
Ⅶ　褐灰色砂質土層
Ⅷ　灰黄褐色土層
Ⅸ　暗褐灰色土層
Ⅹ　暗褐灰色土層(地山土ブロック多量混入)

EW1トレンチ実測図

L＝8.500m



Ⅰ　耕土
Ⅱ　礫(埋め込み)
Ⅲ　明茶灰色土層
Ⅳ　黒褐色土層
Ⅴa　灰色弱粘質土層
Ⅴb　灰色弱粘質土層
(淡青灰色シルトブロック混入)
Ⅵ　淡青灰色シルト層
Ⅶ　黒色粘質土層
(腐蝕物及び多量の土器を含む)
Ⅷ　暗灰色弱粘質土層
Ⅸ　灰色土層(礫を多量に含む)
Ⅹ　淡青灰色砂層
Ⅺ　礫層

0　5m

EW2トレンチ実測図

第6図　遺構実測図

第Ⅳ章　検出遺構

1．溝状遺構

1号溝

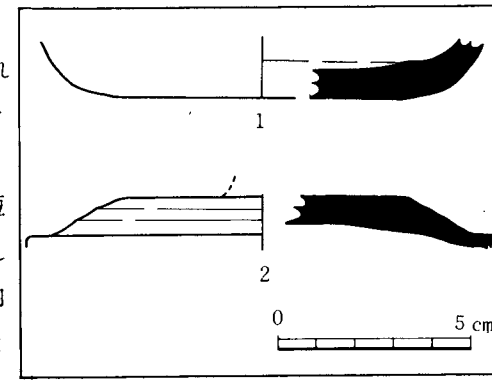
ＥＷ１トレンチの最も東側に検出された溝である。東側を排水路構築の際の掘り方によって切られ、西側も奈良期に比定される２号溝によって肩部上面を欠いている。したがって、法量は明確にできない。現存する西側肩部中位から溝底面への傾斜は緩やかで、溝底レベルは北側が南側よりやや高い。褐灰色砂質土を覆土とし、土師器・須恵器の小片が数点出土したが時期比定できるものではなかった。

2号溝

１号溝を切って構築された上幅1.38ｍ、深さ0.32ｍを測る南北溝である。東側肩部から緩いカーブを描きながら傾斜し、溝底近くで、わずかではあるが三ヶ所の段をもって溝底に至る。一方の西側の傾斜はやや強く、溝底面からの立ち上がり部分には中央部で切れる浅い溝をみることができる。覆土は、上層に明褐灰色土があって暗灰黄色を呈する近代溝が重複し、下層には明褐灰色砂層が堆積して土師器・須恵器の小片が出土した。

出土遺物（第７図１・２）

須恵器　１は無高台の坏である。底部は径７cm、厚さ0.7cmを測り、ヘラ起こしの後ナデ調整が施されている。底部と体部の境界はやや不明瞭で、丸味をもって外上方へ立ち上がっていく。２は蓋である。頂部を平坦に仕上げ、天井部と口縁部との境界は短い段をなし、端部は短く下方へ屈曲すると考えられる。頂部中央にはつまみの剝離痕が認められる。内外面横ナデ調整である。１・２とも奈良期の所産と考えられる。



第７図　２号溝出土土器

3号溝

上幅40cm、深さ10cmを測る南北溝である。断面形はＵ字状を呈し、溝底面は地形の傾斜にそって北から南へと低くなる。覆土は暗褐灰色土の単一層で、月影期に比定できる甕形土器の小片が出土している。

4号溝

３号溝に接して構築された上幅75cm、深さ18cmを測る南北溝である。肩部から緩やかに傾斜し、溝底面は幅40cm前後の平坦面をもつ。北から南へ傾斜している。覆土は３号溝と同一の暗褐灰色土を呈し、若干の土師器小片が出土している。月影式期に比定できると考えられる。

5号溝

２区に検出された上幅24cm、深さ８cmの小型の溝である。断面形はＵ字状を呈するが、一部ピットへの重複があって不整形な部分もある。北から南への流路をもち、やや緩いカーブを描いて

いる。出土土器はなかったが、覆土が暗褐灰色を呈することから月影期と想定される。

6号溝

5区に検出された上幅45cm、深さ約20cmの溝である。断面形は肩部が垂直に溝底に向かう⌊状を呈し、溝底面の幅約20cmを測る。6号土坑をとりまくかのように、隅丸方形ないし円形を呈するかのような流路を示すが、西側の地形が削平されて急激に低くなっているため検出できなかった。覆土は茶灰色土の単一層であり、時期比定の可能な遺物の出土は認められなかった。

7号溝

6区に検出された上幅20cm、深さ約10cmの溝で、断面形がU字状を呈する。東南から西南方向へ隅丸方形状に走り、8号溝と平行する流路を有している。覆土は茶褐色土を呈し、出土遺物は認められなかった。

8号溝

7号溝に平行して走る上幅30cm、深さ約20cmの溝である。7号溝との間隔は約20cmを測り、7号溝と同じく隅丸方形状の流路を示している。地形が削平されているため断定はできないが、7・8号両溝のプランは、あたかも竪穴住居跡の側溝を示すかのようでもある。その場合、一辺が約3mを測る規模のものが復元でき、建て替えがなされたことが想定される。時期は不明である。

2．土坑

1号土坑

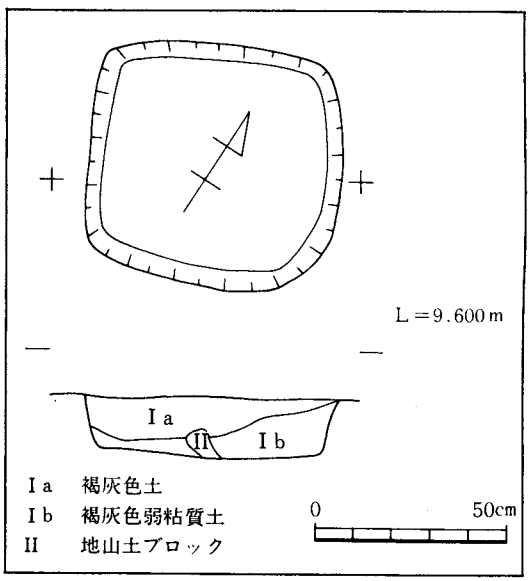
2区にあるが、一部分しか検出されず全体の規模やプランは不明である。検出された部分は極めて不整形である。肩部から緩やかに傾斜し、床面は検出部分の最大幅で約1.6mの平坦面を有している。覆土は、暗褐灰色土に多量の地山ブロックを含んでおり、人為的に埋め込まれたものと想われる。出土土器より月影期の所産と考えられる。

出土土器（第9図1）

土師器　有段口縁の壺形土器である。復元口径14cmを測り、頸部との境界を示す段は弱く、幅約4cmの口縁帯はゆるく外反している。内外面とも横ナデ調整されている。月影期に比定できよう。

2号土坑（第8図）

2区に検出された長辺1.2m、短辺1mを測る方形プランの土坑である。断面形は肩部が少し傾斜する⌊状を呈し、床面は平坦である。深さ約15cmを測る。覆土は二層に分層でき、上層には褐灰色土があり、下層には褐灰色弱粘質土が堆積している。出土土器には受口状口縁を有する小片があるが図示に耐えるものではない。



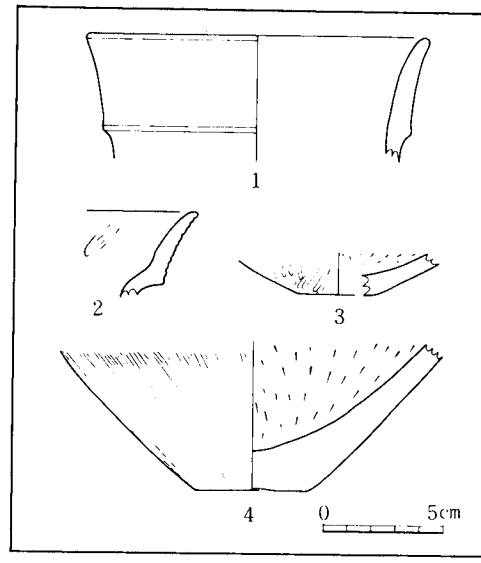
第8図　2号坑実測図

3号土坑

2号土坑の西約20cmにある土坑で、一部分を検出した。東側をピット14・15によって切られ、北側をピット16によって切られている。深さ7cmを測る。覆土は褐灰色土に地山ブロックを多量に含むもので、人為的に埋め込まれたものと考えられる。出土土器より月影期の所産と考えられる。

出土土器（第9図2・3）

土師器　2は有段口縁の甕形土器である。外反する口縁部には11条の擬凹線がめぐり、内面には指頭圧痕が認められる。端部は先細りして外反が強い。内面はナデ調整が施されている。3は径3cmの平底で、外面はヘラ磨きされ、内面はヘラ削りがなされている。



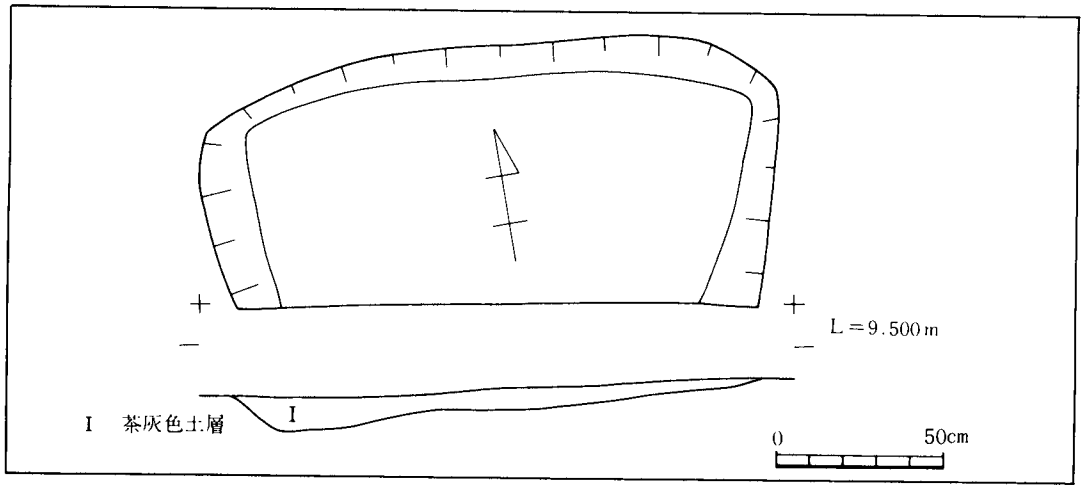
第9図　土坑出土土器

4号土坑（第10図）

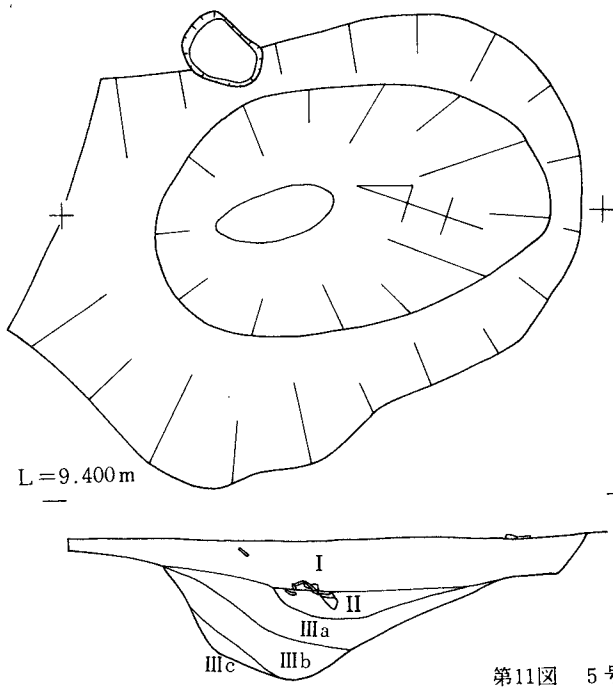
2号土坑から西へ約2mの地点にあり、北側部分だけを検出した。北辺は1.7mを測り、おそらく長方形プランをなすと想定される。床面は東から西に傾斜しており、東側の最も深いところで約20cmを測る。

5号土坑（第11図）

5区に検出された不整形な楕円形土坑である。短軸径約1m、長軸径1.4m強、深さ0.35mを測る。肩部から二段をなして床面に至り、断面形は舟底状を呈する。覆土は三層に識別でき、上から灰黄褐色土、暗褐灰色土、褐灰色土が堆積し、褐灰色土はさらに三層に分層できる。出土土器には高坏形土器片や甕形土器片の出土があったが、それらの多くは不心得者によって持ち去られてしまった。出土土器は月影期に比定できるものであった。



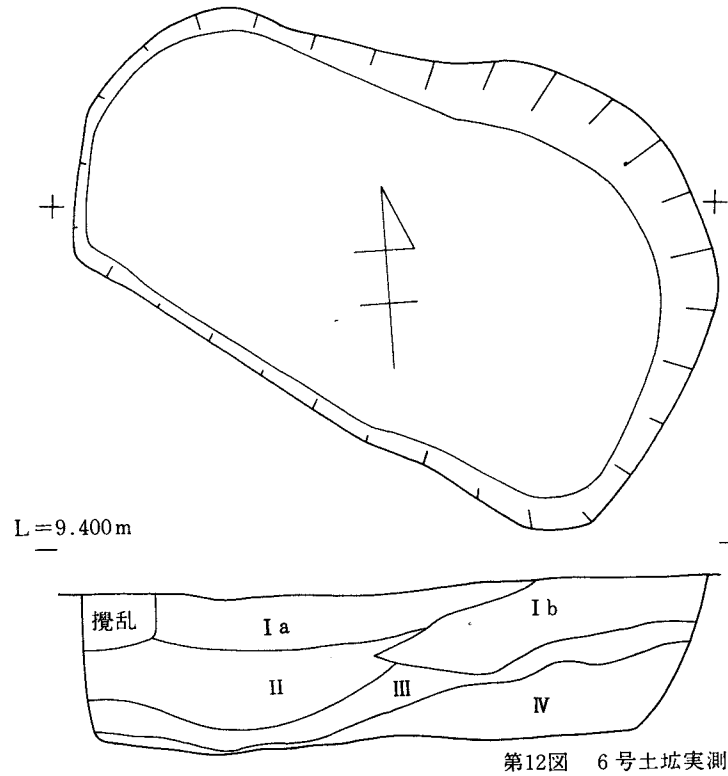
第10図　4号土坑実測図



I　灰黄褐色土層
II　暗褐灰色土層
IIIa　褐灰色土層
IIIb　暗灰色弱粘質土層
IIIc　褐灰色土層
（地山ブロックを含む）

0　50cm

第11図　5号土坑実測図



Ia　暗褐灰色土層
Ib　暗褐灰色土層
（灰白色土ブロックを若干含む）
II　暗灰色土層
（灰色粘質土ブロックを多量に含む）
III　黒褐色弱粘質土層
IV　淡青灰色砂質土
（黒褐色土ブロックを含む）

0　50cm

第12図　6号土坑実測図

出土土器（第９図４）

土師器　径4.8cmを測る底部である。内面はヘラ削りで外面はハケ調整である。外面には煤が付着しており、甕形土器であろう。

６号土坑（第12図）

５号土坑の西約２ｍの地点にある不整形な長方形を呈する土坑である。長辺約1.７ｍ、短辺約0.８ｍ、深さ0.４ｍを測る。断面形は凵状を呈し、床面は平坦である。覆土は、四層に分層でき、いずれも東から西に傾斜する堆積を示している。出土土器に図示できるものはない。

３．その他の遺構

掘立柱建物跡（第13図）

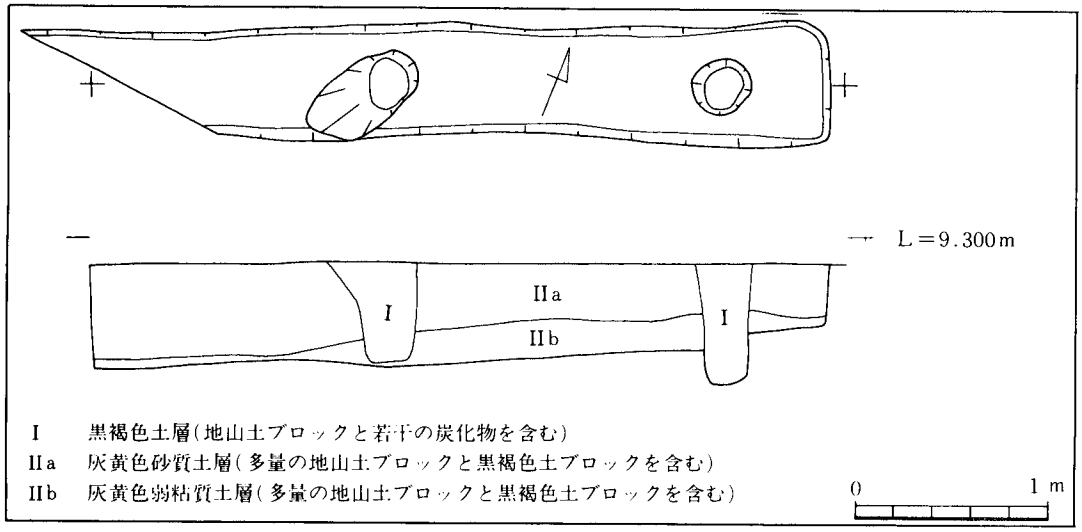
幅0.６ｍ、長さ4.２ｍ以上、深さ0.５ｍを測る溝状の掘方に、約1.８ｍの間隔をおいて柱根跡を配するもので、いわば布掘状の手法をとるものである。掘方は、地山と黒褐色土ブロックを多量に含む灰黄色土で人為的に埋め込まれており、柱根跡は黒褐色を呈し、径約30cmと約60cmを測る。本来この種の建物跡は、掘方の長さ５ｍ前後で、４ｍ前後の間隔をおいて二条並列させるものであり、柱根を残す例もある。本例は、片側の掘方の一部分だけを検出したものである。なお、掘方より擬凹線を有する有段口縁の甕形土器の小片が出土しており、月影期に比定されると想われる。この種の建物跡の類例には、金沢市塚崎遺跡、野々市町御経塚ツカダ遺跡、小松市高堂遺跡などにみることができる。

ピット

検出されたピットは総数46個を数える。調査範囲が狭いことから柱列ないし建物跡などの検出には至らなかった。

出土土器（第14図１～４）

１は、ピット15より出土した「く」の字口縁の甕形土器である。口径18.2cmを測り、端部は不

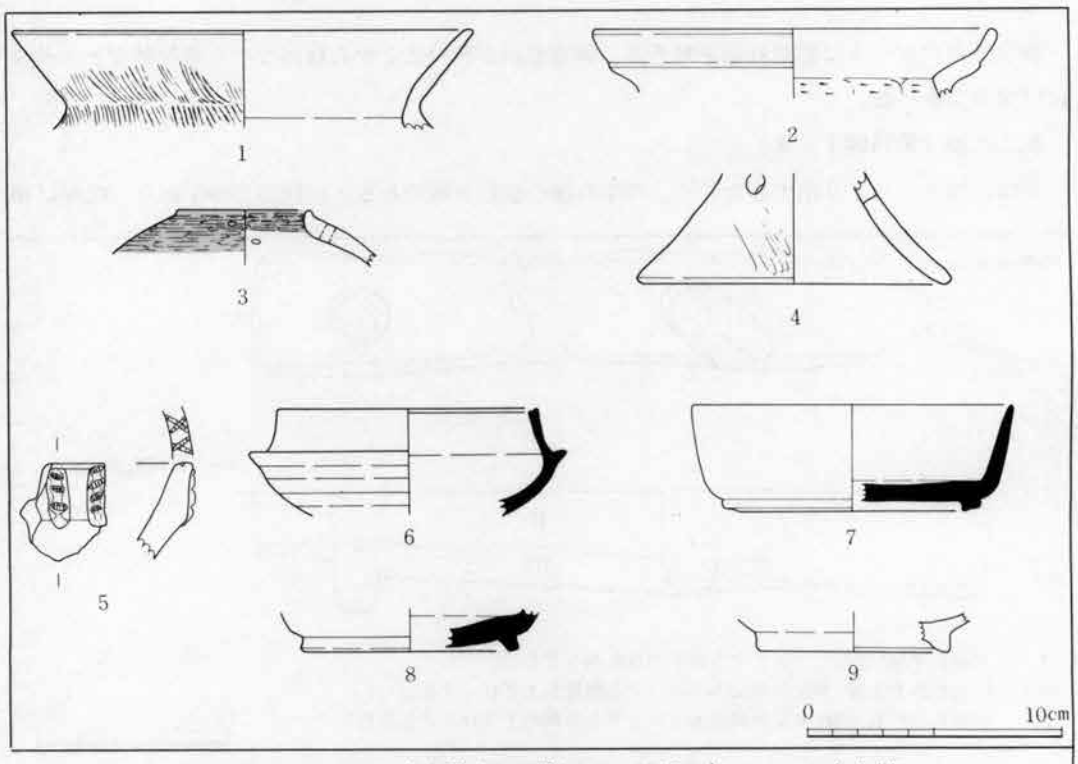


第13図　掘立柱建物跡実測図

明瞭な面取りがなされている。2は、ピット18より出土した有段口縁の甕形土器で、口径15.6cmを測り、やや内彎気味に外傾する。3は、ピット14から出土した口径5.2cmを測る無頸壺で、口縁部には2孔一対の穴が穿たれている。外面と内面の口縁部はヘラ磨きのうえ赤彩されている。4は、ピット11から出土した高坏の脚部である。外面はヘラ磨きされ、3孔の透穴が穿たれている。これらの土器は月影式の範疇で捉えられるものであろう。

ＥＷ２トレンチ西端落ち込み（第６図）

ＥＷ２トレンチとは、調査対象区の最も西に設定されたトレンチである。この調査区では、耕土下に明茶灰色を呈する耕地整理の際の盛土がなされており、現地表は一見緩やかな傾斜地にみえる。しかし、本来は急激な地形変化を示す地点であることが土層観察より明らかとなった。調査区東側で地山と考えられる礫層が約30ｍ西へいくと急に傾斜し、その上には腐蝕物と土器片を含む黒色粘質土と黒褐色土が堆積するようになる。その傾斜もわずか５ｍ程で平坦部へと移行し、礫層は青灰色粘土層へと変わり、その上には灰色弱粘質土や黒褐色土が平行堆積するようになる。すなわち、その急激な落ち込みは、東の微高地と西の低湿地との地形変換点にあたることを示している。と同時に、集落領域の西端にあたることも示しているともいえる。出土した土器も地形の傾斜にそった流れ込みによって堆積したものと考えられた。なお、低湿地にあたる平坦部では、水田跡の可能性が考えられたので、土層には注視したものの、畦畔などは確認できなかった。



第14図　ピットおよび包含層出土土器（１～４はピット、５～９は包含層）

出土遺物（第15・16図）

土師器　1～6は有段口縁の甕形土器である。1・2は口縁部に擬凹線をめぐらすもので、1は口縁部内面に指頭圧痕がみられ、端部の外反が強く内面に弱い稜を有している。2の口縁部はやや直立気味である。3～6は外反する口縁部の内外面が横ナデ調整されているものである。6は頸部から口縁部への屈曲部の稜が明瞭で、胴部上位外面は横ハケ調整が施されている。1～4は、金沢市南新保D遺跡に類例をみるもので、月影式土器にあっても新しい時期の所産と考えられるものであり、5・6は、金沢市押野西遺跡L－4号土坑などに類例をみる古府クルビ式併行に比定できるものであろう。

7～16は「く」の字口縁の甕形土器である。7は端部が横ナデによって面取りされ、上端はややつまみあげられている。8は外反が強く端部が先細りし、9は丸くつくられているものである。11は端部に面をもち、内面がわずかに肥厚している。内面の肩部には指頭圧痕が認められる。外面の調整は摩耗のため観察できないが、胴部上半には12と同様に横ハケが施されていたものと想われる。13～15は端部に面をもち、内面がわずかに肥厚するものであり、14はやや稜角的な面をもっている。16は内面の肥厚は内傾している点で他のものと異なる。7～10は、ほぼ月影式土器として大過ないが、口縁端部のあり方は多様性に富んでいるといえる。11～15は、先述の押野西遺跡や金沢市二口六丁遺跡などに類例をみる古府クルビ式併行に比定できよう。16は、内面の肥厚部の内傾が著しいことから、それらより後出的要素をもつといえ、高畠式に比定されると想われる。

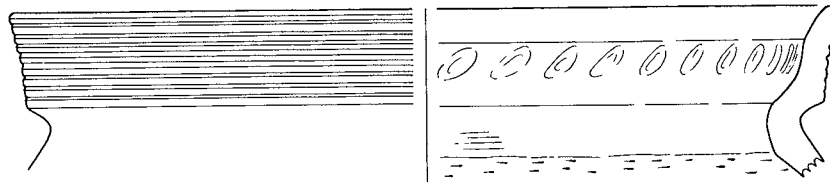
17～20は壺形土器である。17は「く」の字口縁で、滑らかな肩部から球形に近い胴部を有するタイプと想われる。18は外反する有段口縁を有し、口縁部内外面はヘラ磨きされている。17・18は、南新保D遺跡などに類例をみるものである。19は、外反する有段口縁部外面に半截竹管文を組み合わせたS字状文が二段に施され、スクリーントーンで示した部分は円形浮文の剥離痕である。月影式土器にあっても新しい段階の大型壺とみられるが、円形浮文などの加飾性という点では古府クルビ式土器に系譜の連なるものである。S字状文については、弥生時代終末期に盛行するS字状スタンプとは異質であり、同列の系譜で捉えるには問題があろう。20は外反する有段口縁部の端部下端と外面屈曲部に斜行する刻目が施されている。月影式土器の新しい段階に比定できる。

21～24は底部である。25は蓋形土器で、ヘラ磨きの後赤彩されている。26・27は外反しつつ広がる高坏形土器の脚部であろう。27は2段の透穴を有し、月影式土器の新しい段階から古府クルビ式にかけてみられるものである。28～30は器台形土器の脚部であろう。31～33は、低くずんぐりした柱状部から強く外反して屈曲する高坏形土器であり、土師器第Ⅳ様式に比定されよう。

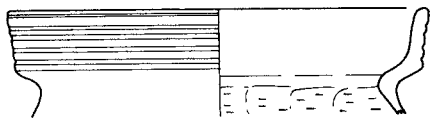
36・37は赤彩された土師器埦である。36の底部は回転削りであり、奈良時代末期に比定できると想われる。

須恵器　34は甕形土器である。35は坏底部であり、36・37の土師埦と同様の時期が考えられるが断片であり明確にし得ない。

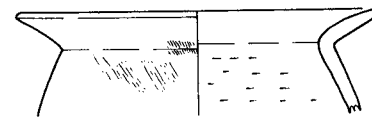
土製品　38は、長さ4cm、孔径1.3cm、重さ23gを測る管状土錘である。



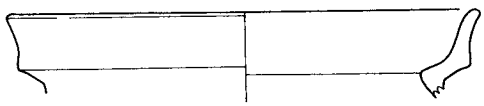
1



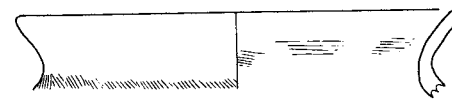
2



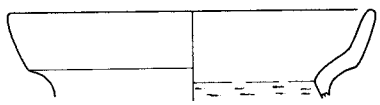
8



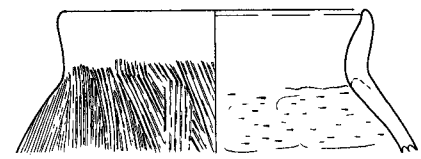
3



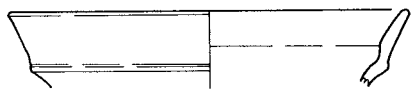
9



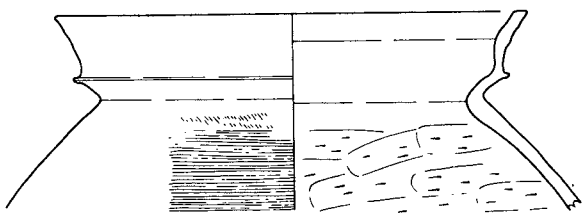
4



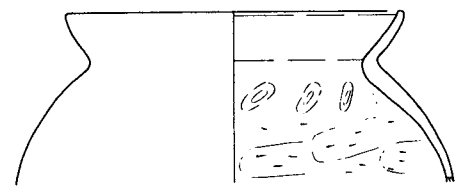
10



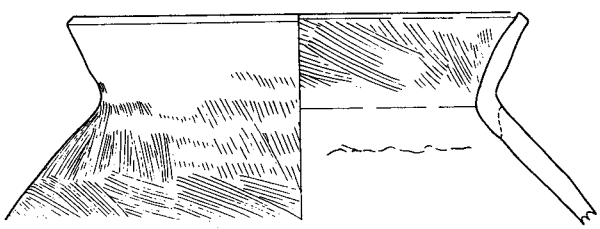
5



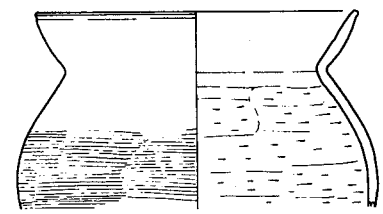
6



11



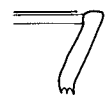
7



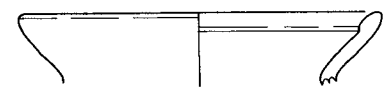
12

13

14



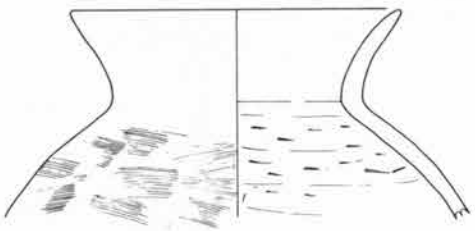
15

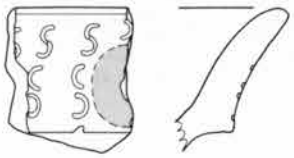


16

0 10cm

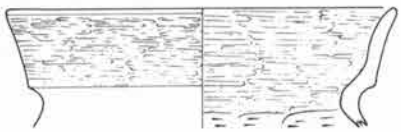
第15図　EW２トレンチ西端落ち込み出土土器（１）

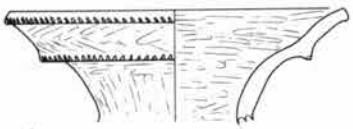

17


19

21

22

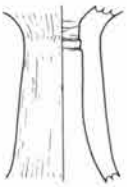

18


20

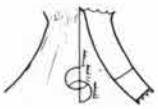
23

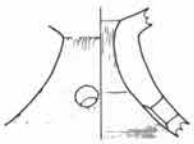
24

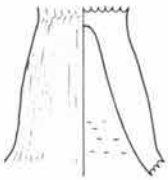
25

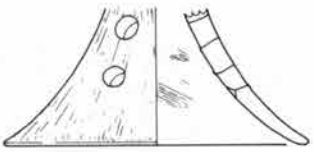

28

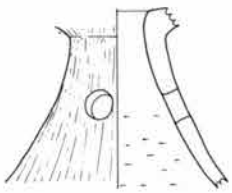
31


26

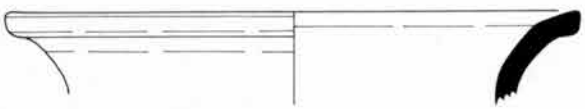

29


32

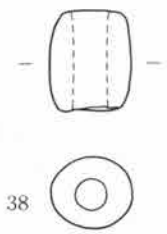

27


30

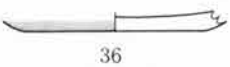
33


34

37


38

35


36

0 10cm

第16図　EW２トレンチ西端落ち込み出土土器(２)

第2表　ＥＷ２トレンチ西端落ち込み出土土器観察表

番号	器　種	法量（cm）	胎　土	焼　成	色　調	器形及び調整の特徴等
1	甕	口径　32.8（推）	良　好	良　好	淡褐色	外傾する有段口縁、内面の端部付近は外側へまげられている、擬凹線８条、内面に連続する指頭圧痕、内面の口縁部はナデ、内・外面の頸部はハケのあとナデ、内面の肩部はヘラ削り、
2	〃	口径　16.4	やや不良	やや良好	〃	やや外傾する有段口縁、端部は丸みをもつ、擬凹線５条、外面の頸部と内面の口縁部はナデ、内面の肩部はヘラ削り、外面に煤付着、
3	〃	口径　18.4	やや良好	〃	黄橙褐色	外反する有段口縁、外面と内面の頸部の屈曲が明瞭、内・外面ナデ、
4	〃	口径　14.2	並	〃	淡褐色	外傾する有段口縁、内・外面の屈曲はやや不明瞭、外面と内面の口縁部はナデ、内面の肩部はヘラ削り、外面に煤付着、
5	〃	口径　15.8	やや不良	〃	〃	外傾する有段口縁、内面の口縁部中位がやや肥厚する、内・外面ナデ、
6	〃	口径　18.8	並	〃	外　灰褐色 内　淡灰褐色	外反する有段口縁、外面の屈曲部の稜が発達している内面の口縁部中位がやや肥厚し、端部はほぼ水平の面をもつ、口縁部の内・外面はナデ、外面の肩部は水平方向のハケ、内面の肩部はヘラ削り、外面の口縁部と内面の頸部（ともに一部）に煤付着、
7	〃	口径　17.5	〃	並	灰褐色	くの字口縁、端部はナデによって面取りされ、上端はややつまみあげられている、外面の口縁部と内面の肩～胴部はナデ、外面の肩部と内面の口縁部はハケのあとナデ、外面の胴部はハケ、内面の肩部に接合痕あり、外面の口縁部に煤付着、
8	〃	口径　12.8	〃	〃	黄灰褐色	外反ぎみのくの字口縁、端部は先細りする、口縁部の内・外面はナデ、外面の肩～胴部はササラ状のナデ、内面の肩部はヘラ削り、胴部はナデ、外面の胴部に黒斑あり、
9	〃	口径　17.4	〃	〃	〃	外反ぎみのくの字口縁、端部は丸くおさめている、外面の口縁部と内面の頸部はナデ、内面の口縁部はハケのあとナデ、外面の頸部はハケ、外面の口縁部に煤付着、
10	〃	口径　11.9	〃	良　好	淡褐色	弱いくの字口縁、端部は内上方へややつまみあげられている、口縁部の内・外面はナデ、外面の肩部はハケ、内面の肩部はヘラ削り、内面の頸部に接合痕あり、
11	〃	口径　13.3	〃	やや不良	〃	くの字口縁、端部は不明瞭な面を有し、内面はわずかに肥厚する、口縁部の内・外面はナデ、外面の肩～胴部は摩耗のため観察不能、内面の肩部はナデと指頭圧痕、胴部はヘラ削り、
12	〃	口径　12.6 胴部径14.3	やや不良	良　好	黄褐色	くの字口縁、端部は丸くおさめている、外面の口縁～肩部と内面の口縁～頸部はナデ、外面の胴部は水平方向のハケ、内面の肩～胴部はヘラ削り、
13	〃	――――	〃	〃	淡褐色	くの字口縁、端部は丸みをもち、内面はやや肥厚する、外面はナデ、内面はハケのあとナデ、
14	〃	――――	並	並	黄褐色	くの字口縁、端部は内傾する面を有し、内面は肥厚する、内・外面ナデ、

番号	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	器形及び調整の特徴等
15	甕	————	並	並	淡褐色	くの字口縁、端部はほぼ水平の面を有し、内面は肥厚する、内・外面ナデ、外面に煤付着、
16	〃	口径 14	〃	〃	黄橙褐色	くの字口縁、端部は丸みをもち、内面は肥厚する、内・外面は摩耗のため観察不能、
17	壺	口径 14.2	〃	〃	褐～黄褐色	くの字口縁、端部はやや不明瞭な面取り、口縁部の調整は摩耗のため観察不能、外面の肩部はハケ、内面の肩部はナデ、
18	〃	口径 15.2	〃	良好	淡褐色	やや外反する有段口縁、外面と内面の口縁～頸部はヘラ磨き（一部ナデによって消されている）、内面の肩部はヘラ削り、
19	〃	————	〃	〃	〃	外反する有段口縁、外面には半截竹管(文)を組み合わせたS字状のスタンプが2段（下段はややくずれている）に施されるとともに、浮文（円形と思われるが剝離痕のみのため詳細は不明、現存1）がS字状のスタンプに先だって貼付されている、また、屈曲部に刻み(現存1)が施されている、内・外面ともにナデ、ただし外面の頸部付近はハケ、
20	〃	口径 13.4	良好	〃	〃	大きく外反する有段口縁、端部は面を有し、下端に連続する斜行刻目をもつ、外面の屈曲部にも連続する刻目をもつ、内・外面ともにヘラ磨き、
21	(底)	底径 2.1	並	〃	褐色	平底、外面はハケ、内面はナデ、外面に煤付着、
22	〃	底径 4.4	〃	〃	淡褐色	底部下面はわずかに凹む、たちあがりは内彎する、外面は指頭によっておさえている、内面と底部下面はナデ、
23	〃	底径 5.5	〃	〃	〃	底部下面は凹む、たちあがりは内彎する、外面はハケのあとヘラ磨き、ただし底部下面と底部下位は指頭によっておさえている、内面はハケ、ただし底部上面は底部下面の凹みと対応した指頭による凹みあり、内面は黒灰色を呈し、一部外面に及ぶ（黒斑に類するもの）
24	〃	(底径4.5)	〃	〃	黄褐色	底部下面は不整形ながら下方に凸、外面はハケのあとナデ、底部下面はヘラ削り、内面はハケのあとナデ、内面は黒灰色を呈し、一部外面に及ぶ(黒斑に類するもの)
25	蓋	つまみ部径 3.8	良好	〃	淡褐色	つまみ部の上面は凹む、端部は外側へややまげられ突出する、体部はほぼ直線的にのびる、外面(つまみ部上面を含む)はヘラ磨き、内面はヘラ磨きのあと ナデ、内・外面ともに赤彩、
26	高坏	脚頂部径 2.5	〃	〃	橙褐色	脚部は外反しつつ広がる、孔4(径1cm)、外面はヘラ磨き、内面は(ヘラ削りのような)ハケのあとナデ、坏部を欠く、
27	〃	脚部径11.8	〃	〃	〃	脚部は外反しつつ広がる、2孔3ケ所（6、径1.1cm）外面はヘラ磨き、内面はハケのあとナデ、
28	器台	脚頂部径3	〃	〃	淡褐色	脚部は外反しつつ広がる、孔3(径1cm)、外面はヘラ磨き、内面はハケのあとナデ、器受部を欠く、
29	〃	脚頂部径3	〃	〃	〃	脚部は細く長い、外面はヘラ磨き、内面はナデ、

番号	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	器形及び調整の特徴等
30	器台	脚頂部径 3.8	並	やや良好	橙褐色	脚部は外反的に広がるが、やや高い、孔3(径1.2cm)外面はヘラ磨き、内面は(ヘラ削りのような)ナデ、器受部を欠く、
31	高坏	脚頂部径 3.3	やや不良	並	黄橙褐色	坏部の屈曲は不明瞭、器壁がやや厚い、外面はハケのあとナデ、屈曲部に指頭圧痕を残す、内面は摩耗のため観察不能、脚部との接合痕あり、
32	〃	脚頂部径 3.5	〃	〃	〃	脚部は外下方へやや開く、器壁がやや厚い、外面はヘラ磨き、内面はナデ、
33	〃	脚部径 12	〃	やや良好	淡黄褐色	脚端部は屈曲し大きく外下方へ開く、外面は摩耗のため観察不能、内面はナデ、
34	甕	口径 22.4	良好	良好	灰～暗灰色	口縁部は外反し、端部付近には自然釉が付着している。内外面横ナデ調整である。
35	坏	底径 6.8	〃	〃	灰色	底部と体部との境界は丸くやや不明瞭である。底部にはヘラ起し痕がみられる。内外はナデ調整である。
36	埦	底径 7	〃	〃	黄褐色	内外赤彩され、底部は回転削りである。
37	〃	————	〃	やや良好	橙褐色	摩耗して調整痕は不明であるが、一部に赤彩痕らしきものが認められる。

第Ⅴ章　包含層出土土器(第14図5～9)

土師器　5は有段口縁の装飾壺である。口縁部外面には棒状浮文を貼付し、そのうえに3～4個の刻目を施している。また、面をもつ口縁端部にも「×」字状に交差する刻みが施されている。古府クルビ式土器の範疇に入るものと想われる。9は、高台付の内面黒色の土師器であり、坏になると想われるが、断片であり形態や時期については明確にし得ない。

須恵器　6は復元口径10.5cmを測る坏である。たちあがりは内傾し、端部内面は段をなしている。丸味をもつ底部付近はヘラ削りされている。陶邑古窯址群TK47併行に比定できよう。7は復元口径12.6cmを測る高台坏である。底部と体部との境界は丸くなっており、体部は外上方へ直立気味に立ち上がるものである。金沢市浅川1号窯併行期に比定できよう。

第Ⅵ章　まとめ

今回の調査では、月影式土器を中心とする弥生時代終末期ないし古墳時代初頭期とする時期、古墳時代前期Ⅳ期から同後期Ⅰ期、奈良時代後半期に比定できる各期の遺構・遺物の検出があった。とくに月影期が顕著であった。調査面積が狭く、また調査区が微高地から低湿地へ傾斜する緩斜面にあることから際立った遺構は少なかった。しかしながら、今回の発掘調査やそれに先立つ分布調査から、旧地形の復元や地形に対応する遺構の状況、強いては遺跡範囲の把握などという点では有効な手掛りとなったと思われる。すなわち、遺構の検出された範囲は地表約９ｍ代までの微高地の平坦部から緩斜面にかけての部分であり、それからは急斜面となり、ＥＷ２トレンチでみたように遺物の流れ込みは存在するものの、遺構の存在は認められなかった。地表約８ｍ代にかかる低湿地の地点では、グライ土壌が厚く堆積しており、水田跡が存在することが充分予測できたのではあるが、土層からは畦畔などは看取できなかった。周辺の縄文遺跡の多くが微高地を避けて微低地を集落領域としているのに対し、本遺跡は低湿地を控えた微高地を集落領域としており、各時代の経済階梯で集落占地が大きく異っていることを示しているといえる。このことは、本遺跡が月影期に集落設営を始めることと決して無関係ではなく、西に広がる水田適地としての低湿地を意識したがための立地状況といえる。

さて、今回の発掘調査で検出された遺構は、月影期に比定できる溝、土坑、掘立柱建物跡、ピットが大部分を占め、奈良時代に比定できる溝が１条あった。いずれも断片的な検出であり、全体像を捉えられるものは少なかった。その中で、掘立柱建物跡としたものは、本来長さ約５ｍの溝状の掘方を約４ｍの間隔をおいて二条並列させるものであり、布掘状の手法で木柱を埋設させるものである。この種の建物跡は、県下の月影期の遺跡に類例が増加しつつあり、高床式倉庫と考えられているものである。出土土器については、月影式土器にあっても新しい型式の範疇に入るものが圧倒的に多く認められ、本遺跡においては月影期が最も中心をなす時期であることを示している。

月影期の遺跡は、沖積地はもとより扇央部や砂丘後背地、あるいは丘陵縁辺部にまで分布が拡大しており、急激な遺跡増加が認められる。この現象について吉岡康暢氏は[19]、沖積地に基盤をもった弥生中期に定着した母集落の地縁集団の再編成にともなう分村現象と捉え、農具の鉄器化を挺子として人口圧の解消へ向った結果だと考えておられる。また、扇状地や砂丘後背地に立地する月影期の遺跡の多くは短期間で途絶えるという指摘もされている。周辺にある竹松遺跡や下安原海岸遺跡はそうした指摘に該当し、本遺跡の場合は大局的には月影期と宮地期の間に空白期間を置くことは現段階としては可能であろうが、他の周辺の月影期の遺跡と比較して集落規模が大きいと考えられ、狭い調査範囲の成果からではにわかに設営期間を限定することはできない。もし、本遺跡が先に示した空白期間をもつとするならば、月影期における可耕地の獲得と集落の定着が極めて流動的であったといえ、吉岡氏のいう「分村」も決して平静な情況下の中で展開したとは考えられない。月影期を前後する時期には、丘陵部では宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡[20]のような高地性集落の出現、平地にあっては集落の外郭を大溝によって区画する「水城（ミズキ）」的な集落の出

現[21]などがあり、当時は緊張関係の情況下におかれていたものと私考される。今回の調査では、そうした大溝などは検出されなかったものの、そうした周辺情況と本遺跡も無関係で成立したとは考えられない。

註

（1）藤則雄「砂丘・埋没林」（藤則雄他『金沢周辺の第四系と遺跡』・1975年・北陸第四紀研究グループ）
（2）手取川七ヶ用水土地改良区『手取川七ヶ用水誌』・1982年
（3）高堀勝喜「金沢市近効八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」（『石川県押野村史』・1964年）
（4）旭郷土史編纂委員会『旭郷土誌』・1981年、
（5）南久和『金沢市新保本町チカモリ遺跡―遺構編―』金沢市教育委員会・1983年
（6）高堀勝喜・金山顕光・吉岡康暢・浅香年木『加賀三浦遺跡の研究』石川県教育委員会他・1967年
（7）宮本哲郎『金沢市寺中遺跡』金沢市教育委員会・1977年
（8）吉岡康暢他『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会他・1983年
（9）四柳嘉章「竹松遺跡出土の土器」（杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成　本編Ⅰ・1971年）
（10）松任市教育委員会『松任市の文化財』・1982年
（11）四柳嘉章「石川県石川郡松任町倉部出土の壺棺―北陸における壺棺葬について―」（『石川考古学研究会々誌』第13号・1970年
（12）吉田淳「野々市町御経塚ツカダ遺跡発掘調査概報」野々市町教育委員会・1982年
（13）吉岡康暢「周辺地域における古墳時代形成期の様相」（『遠藤元男博士還暦記念日本古代史論集』・1970年）
（14）宮本哲郎「金沢市安原工業団地遺跡」金沢市教育委員会他・1977年
（15）石川郡自治協会編『石川県石川郡誌』―復刻版―・1970年
（16）清水隆久『横江史』・1961年
（17）橋本澄夫『石川県考古学便覧Ⅰ』・1970年
（18）四柳嘉章「松任町宮永遺跡」（『北陸自動車道路関係埋蔵文化財調査概要報告書（Ⅰ）』・石川県教育委員会・1969年）
（19）吉岡康暢「墳のムラからクニへ」（『古代の地方史・4』・1978年）
（20）米沢義光『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書』・宇ノ気町教育委員会・1980年
（21）金沢市南新保D遺跡、同北安江遺跡、小松市高堂遺跡などがある。

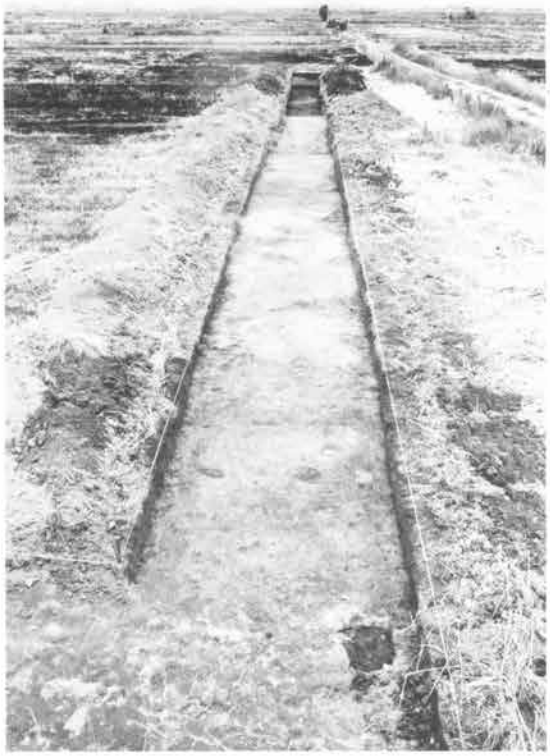
宮永遺跡周辺の空中写真

EWⅠトレンチ 東側から(3区～)

EWⅠトレンチ 東側から(6区～)

EWⅠトレンチ 東側から(10区)

NSトレンチ 北側から

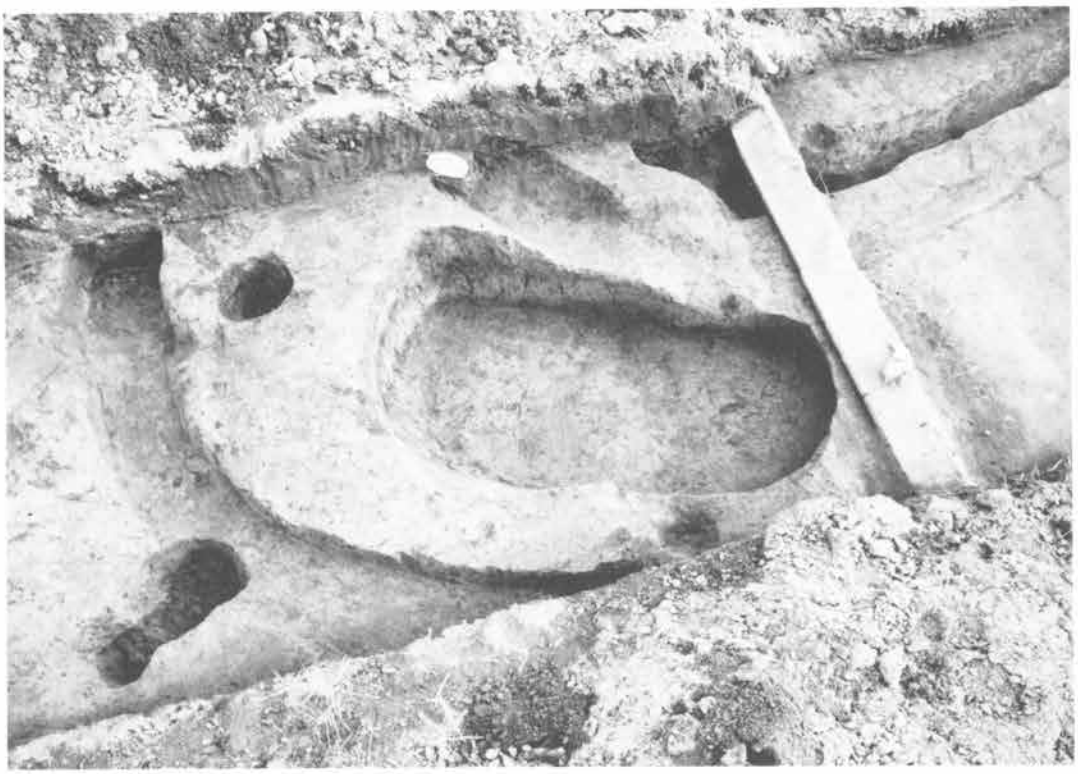


EW2トレンチ 東側から

EW2トレンチ西端落ち込み 東側から

1 ～ 4 号溝

5 号 土 坑

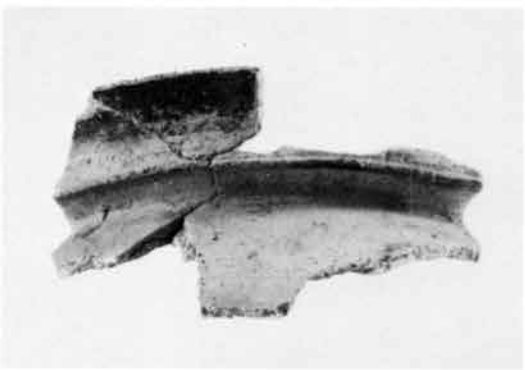


6 号 土 坑

掘立柱建物跡（検出状況）

掘立柱建物跡

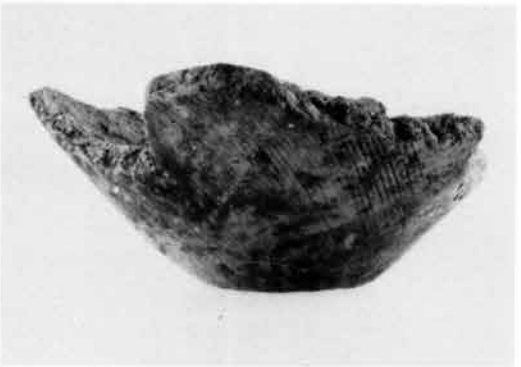
A



B

C

D

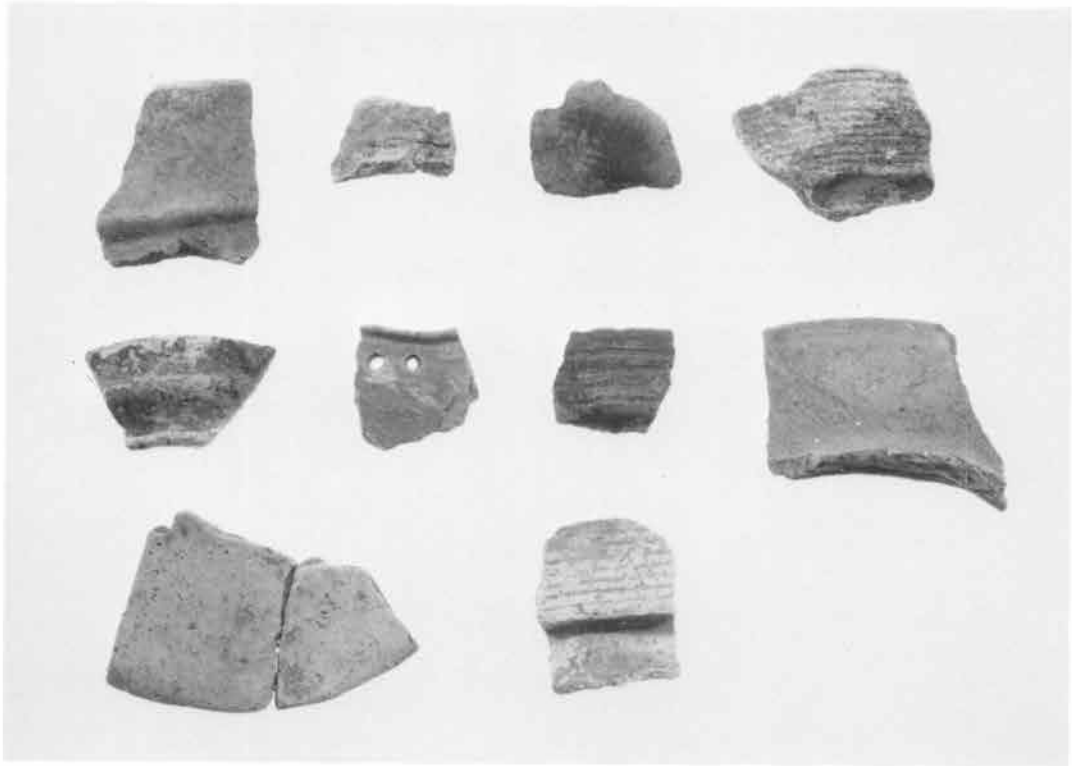


E

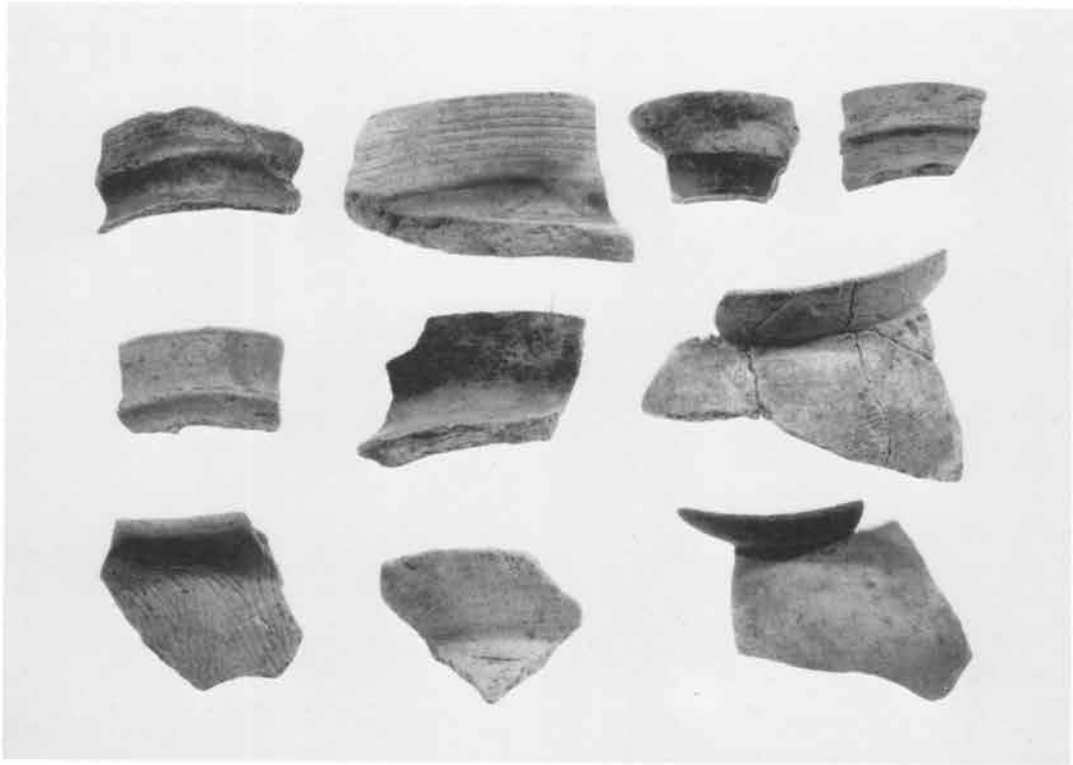
F

G

A　甕形土器
B　〃
C　壺形土器
D　〃
E　底部
F　器台形土器
G　須恵器



遺構出土土器



EW2トレンチ西端落ち込み出土土器

EW2トレンチ西端落ち込み出土土器

EW2トレンチ西端落ち込み出土土器

松任市宮永遺跡

1984年3月

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
電話（0762）43－7692番

印　　刷　北国書籍印刷株式会社
石川県金沢市泉本町2丁目155番地